

## 森茂起先生のご退職によせて

人間科学科教授 大西彩子

森茂起先生は、2022年3月末をもって甲南大学文学部教授を定年退職されます。先生は、1977年に京都大学理学部を卒業後に京都大学教育学部に編入、1979年に卒業され、同年4月に京都大学大学院教育学研究科博士前期課程入学、1981年3月に同課程を修了されました。同年4月に京都大学大学院教育学研究科博士後期課程に進学し、1984年3月に同課程を単位取得の上、満期退学されました。

甲南大学には、1984年4月に講師としてご着任になり、1991年4月からは助教授、1997年4月からは教授として甲南大学で研究と教育に尽力されています。2004年4月には永年勤続による表彰（20年表彰）を受けられています。ご退職される際にはなんと39年間の長きにわたり甲南大学にお勤めいただいたこととなります。

その間の主な役職は、1997年および2006年に人間科学科主任を、2002年11月から2010年3月および2019年4月から2023年3月までの約11年半、甲南大学人間科学研究所長を務められ、2005年4月から2006年3月および2012年4月から2014年3月までの3年間、甲南大学心理臨床カウンセリングルーム長を、2010年4月から2年間は甲南大学文学部長を、2019年4月から2年間は甲南大学大学院人文科学研究科長を務められ、臨床心理士の養成、学部と研究科および人間科学研究所の運営に多大な貢献をされました。

森先生のご研究は、トラウマの臨床心理学的検討を中核としながら、その対象は子どもの虐待とネグレクト、阪神淡路大震災の震災体験、戦争体験によるPTSDなど幅広く展開されてきました。その成果は、国内外の学会で発表され、日本のトラウマ研究のleading expertとして業績一覧にある100を超える多数の論文にまとめられました。なかでも『トラウマの発見』（講談社、2005）では、トラウマ研究を歴史的に振り返るという方法を試みられ、トラウマ研究が19世紀後半の鉄道事故による惨事トラウマから始まり、

ジャン＝マルタン・シャルコーの催眠療法やピエール・ジャネの解離、ジークムント・フロイトに代表されるヒステリーとしてのトラウマ神経症の時代を経て第二次世界大戦後にPTSDという概念が一般化するまでの紆余曲折の歴史を紹介されています。デヴィッド・リーンの映画『ライアの娘』（1970）におけるトラウマの描写を資料として用いておられるのが映画にも精通されている森先生らしい所です。博識な森先生には人間科学科の中で領域間の橋渡しを担っていただいておりますが、『埋葬と亡霊—トラウマ概念の再吟味』（人文書院、2005）は心理学、哲学、文学、医学などの分野を超えた共同が実現しており森先生の学際性が発揮されています。『フェレンツィの時代：精神分析を駆け抜けた生涯』（人文書院、2018）では、国際精神分析学会の黎明期に生きたシャーンドル・フェレンツィの生涯を、その理論と実践とともに詳細に描いておられます。また、『「社会による子育て」実践ハンドブック』（岩崎学術出版社、2016）を子どもの支援をする実践家向けにまとめられたように、社会的養護などの子どもの福祉にご関心が高く、代表的なものとして兵庫県虐待専門総合アドバイザーや兵庫県こころのケアセンターこころのケア研究推進協議会委員、兵庫県社会福祉審議会委員、兵庫県子ども・子育て会議会長、兵庫県地域創生戦略会議委員などの役職を果たされ、地域社会に素晴らしい貢献をされています。森先生の豊富な知識とご経験を基にした授業は社会と繋がる知の体験として学生たちの貴重な学びとなったことでしょう。

人間科学科にとって森先生の存在は大きいと同時にあまりにも自然であり、森先生のご退職されたあとの人間科学科は以前とは異なる色を帯びるように感じます。改めて森先生の39年間の甲南大学におけるご尽力とご貢献に心からの敬意と、深い感謝を申し上げ、今後のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。